

「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習と評価の研究

永田 繁雄¹⁾ 松尾 直博¹⁾ 遠藤 信幸²⁾ 面川 怜花³⁾ 川井 優子⁴⁾ 齋藤 大地⁴⁾ 杉本 遼⁵⁾

- 1) 東京学芸大学
- 2) 東京学芸大学附属小金井小学校
- 3) 東京学芸大学附属世田谷小学校
- 4) 東京学芸大学特別支援学校
- 5) 東京学芸大学附属大泉小学校

目 次

1. 研究の目的	44
2. 研究の内容	44
3. 研究の計画	46
4. 研究の実際	46
4. 1. 小学校低学年の実践	46
4. 2. 小学校中学年の実践	54
4. 3. 小学校高学年の実践	54
5. 研究の成果と今後の課題	58
6. 参考文献	58

「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習と評価の研究

永田 繁雄¹⁾ 松尾 直博¹⁾ 遠藤 信幸²⁾ 面川 怜花³⁾ 川井 優子⁴⁾ 齋藤 大地⁴⁾ 杉本 遼⁵⁾

- 1) 東京学芸大学
- 2) 東京学芸大学附属小金井小学校
- 3) 東京学芸大学附属世田谷小学校
- 4) 東京学芸大学特別支援学校
- 5) 東京学芸大学附属大泉小学校

1. 研究の目的

平成27年7月に告示された「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 第2節道徳科の指導」の中に「問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法の工夫をする」とある。そして、「第3節 指導の配慮事項」の中には「5 問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導」として、道徳科の問題解決的な学習とはいかなるものであるのか規定されている。道徳科の問題解決的な学習とは「ねらいとする道徳的 諸価値について自己を見つめ、これからの生き方に生かしていくことを見通しながら、実現するための問題を見付け、どうしてそのような問題が生まれるのかを調べたり、他者の考え方や感じ方を確かめたりと物事を多面的・多角的に考えながら課題解決に向けて話し合うことである。そして、最終的には児童一人一人が道徳的諸価値のよさを理解し、自分との関わりで道徳的価値を捉え、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われるようにすることである」とある。道徳の指導の一つとして「問題解決的な学習」について規定されたことよって、現場の教師は困惑が隠せない。そもそも、道徳の時間は「問題解決」の授業展開ではなかった。教材の人物に自己関与させ、自分の生き方なり方を見つめる授業の在り方が一般的であった。この道徳科としての「問題解決的な学習」をどのように考えて、子どもたちにとって学びのある授業として構成していくのが課題といえる。

そして、道徳科に向けて「問題解決的な学習」と共に話題となっている問題として「評価」があげられる。道徳科における評価の在り方として「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）」では、道徳の評価についていくつか記載されている。その中で一部抜粋する。「学習活動における「児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子」を、観点別評価（分析的に捉える）ではなく個人内評価として丁寧に見取り、記述で表現することが適切であり、具体的には個人内評価を記述で行う」「観察や会話、作文やノートなどの記述、質問紙などを通して、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」とある一定の評価の基準が示されている。今年度は、低中高学年で授業を行い、児童の発達段階を考慮した評価の在り方やその評価の方法を探っていく。「評価の方法」を考えていくが、「評価のための研究」「評価の文言の研究」ではなく、子どもの成長の一面を見取るための研究としていきたい。

来年度から行われる「特別の教科 道徳」の完全実施に向け、「問題解決的な学習」と「評価」の在り方についてさらなる研究を行っていく。

2. 研究の内容

東京学芸大学附属小学校、特別支援学校の児童・生徒を対象とした読み物資料を中心とした教材を活用した道

徳科の授業実践を通して、徳科における「問題解決的な学習」の授業モデルと評価の在り方を提案し、研究報告書や日本道徳教育学会等で発信することを目指していく。研究の視点としては以下に記す。今年度は研究対象の児童を低中高として発達段階をより考慮して研究を行っていく。各附属学校の特色を生かし、児童の実態に即した授業を実践して、その研究内容や成果を附属学校研究会（小金井地区）で検討する。

A. 徳科における「問題」の捉え方

「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」では、問題解決的な学習における道徳的な問題について以下の4つが記されている。

- ①道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題
- ②道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題
- ③道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題
- ④複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

昨年度はこれらを子どもたちの生活レベルに照らし合わせて考え、②③④の文言を具体的な授業において用いるとし以下のようにとらえ直した。

- ⑤道徳的価値についての理解を深める問題
- ⑥道徳的価値に関わる自己の在り方を深く見つめる問題
- ⑦教材から生まれる複数の道徳的価値の間から生まれる問題

昨年度の研究の中で、実際に授業を行うと道徳の授業の中で行う「問題」とはこの3つの中でも⑤と⑦であることが多かった。ただ⑦については、「複数の道徳的価値の間から生まれる」というよりも、「教材で扱われる人物の行為や思いについての問題」であることが多く、道徳的価値の対立という側面はあまり見られなかった。そこで今年度の研究では、道徳の授業で取り扱う問題と設定した。

- ☆道徳的価値についての理解を深める問題
- ☆教材の人物の行為や思いから生まれる問題

B. 問題を解決するための学習指導過程

「道徳的な問題」を授業の中に設定していくが、本年度も子どもたちの実態を踏まえ、一定の箇所を設定することはしない。授業者が子どもたちの実態を踏まえて、子どもたちに何を考えさせたいのかを明確にした授業展開の中で個々が問題を学習の中で設定していく。子どもたちが問題を把握しやすい箇所やその問題の作り方は授業者の授業プランにもよるが、授業者が考えさせたいこととして「問題」を提示することをそろえて行う。今年度は「一時間」という枠組みだけで捉えるのではなく、「複数時間」での授業の展開も考えていく。「カリキュラム」という視点をもって道徳の時間を構成していく。

C. 問題を生み出す教材の活用

「問題解決的な学習」が道徳の授業において行われている際に危惧することは、子どもたち自身に「問題」を作らせていくような授業である。その問題という「話し合いたいことある？」等、学級で起こっている様々な

問題を授業の問題とすることである。子どもたちが道徳的価値な価値について自らの生き方や在り方を見つめ直すことができるような問題を生み出すために、教材を用いながら自己関与させ道徳的問題を追及させていく。読み物資料に限らず、子どもから問いが生み出されるような教材を活用していく。

D. 評価の方法

授業者は評価を行うにあたり、授業における児童のどのような姿を見ていくのかを明確にして授業に臨む。そのために指導案には「評価の視点」を記載する。

また具体的な方法として、授業においての子どもたちの発言や思考の流れを個人内評価に生かしていけるように、各授業者が蓄積していく。今年度は児童の学習履歴を教師も児童も共に確認し合うことができるように「道徳の時間に使うノート」を使用していく。学習履歴を評価に生かしていく。

3. 研究の計画

東京学芸大学附属小学校、特別支援学校の子どもたちを対象した道徳科の授業実践の評価・改善を通じた授業づくりから、教材を活用した道徳科の授業モデル・評価の在り方を構築する。

【1年次】プロジェクト研究の企画と授業実践Ⅰ（平成28年度）

- ①プロジェクト企画会：研究計画の企画、日程調整、役割分担 等
- ②問題解決的な学習についての理論研究：書籍の調査、研究会への出席
- ③授業実践：小学校、特別支援学校ごとの授業計画の立案と実践、評価
- ④研究会：各校の授業実践の経過報告、協議、次年度への計画立案

【2年次】授業実践Ⅱと授業モデル・評価の構築（平成29年度）

- ①授業実践：1年次とは違う教材、学年等を考慮した授業計画の立案、実践
- ②研究会：各校の授業実践の経過報告、協議
- ③授業モデル、評価の検討：授業モデルも評価モデルの提案
- ④成果発表会、学会発表：授業実践事例集の作成、学会発表

4. 研究の実際

4. 1. 小学校低学年の実践

4. 1. 1. 小学校2年生 教材名「七つの星」（みんなのどうとく1年 学研）

1) 主題名

わたしのすがすがしい心、あなたのすがすがしい心（D-21 感動、畏敬の念）

2) 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

すがすがしい心とは、心が洗われるようにさわやかで気持ちがいい様子を意味する。心が洗われるとは、感動して心がきれいになることである。現代は物質的には豊かで快適な毎日を送ることができるようになった。物理的にも時間的にも良くも効率化を図ることが多く、良くも悪くも利便性を求めてしまう。その豊かの一方で、内面的な心を豊かにする時間が減ってきているように思う。

ふと空を見上げると青空が広がり様々な雲の形が流れていくのが見えた。風がたなびき、緑に染まった木々たちが何か語りかけてくるようだ。その場に立っていた私は、心の中がすーっとして浄化されていくような感覚を覚えた。そのとき、自然の雄大さを感じた。

人間の力では到底説明することができない美への感動や崇高なものに対する尊敬や畏敬の念をもつ時間が大切

である。その感じ考える心こそが豊かな道徳性を育む原点ではないだろうか。また、人間としての在り方を見つめ直す際にも先に述べた心が必要である。自然のもの、人工のものと区別するのではなく、美しいもの、清らかなもの、気高いものに接したときの素直な感動、心が揺さぶられる感性を大切にする。低学年の段階では、子どもたちの生活の中に存在している身近な自然の美しさや心地よい音楽、芸術作品などに触れて気持ち良さを感じたり、物語などに語られている美しいものや清らかなものに素直に感動したりするような体験を大事にしながらすがすがしい心を育てていきたい。また、そうした時間を大事にしていきたい。

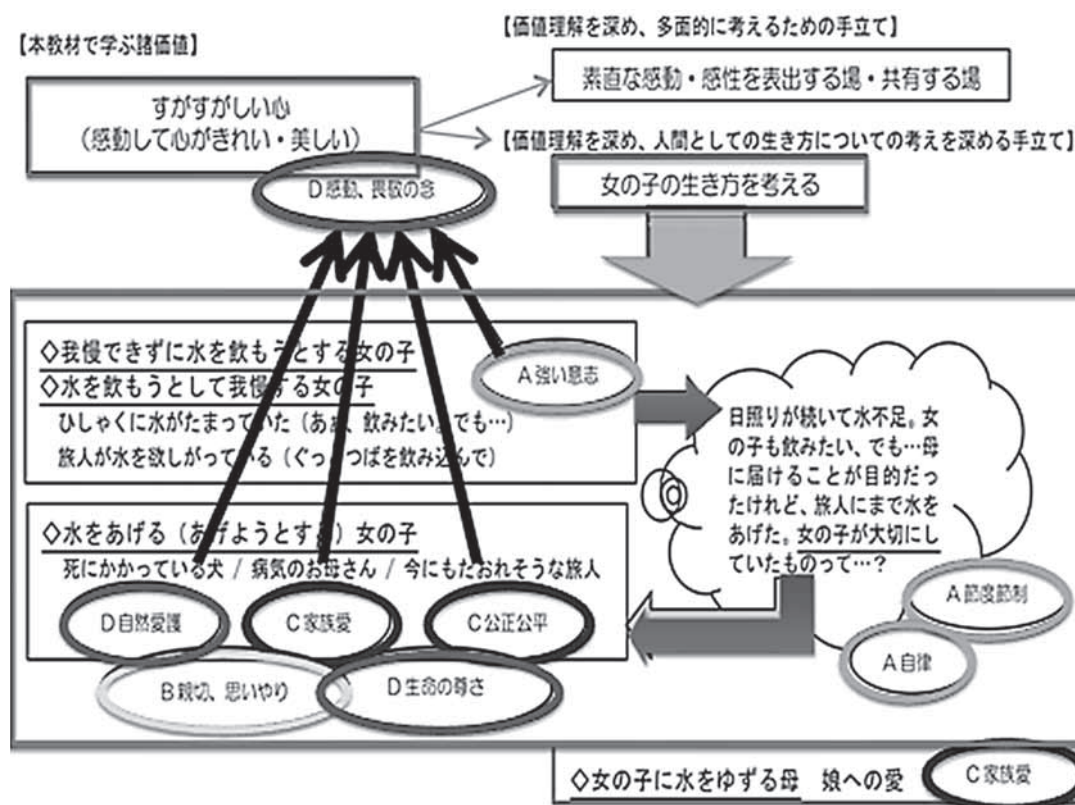
(2) 子どもの実態より

本学級は、入学当初から生活の中に存在している身近な自然の美しさや心地よさを経験とともに実感している子どもが多いように思う。昨年度は、秋を感じながらいちょうの葉に寝転ぶ心地よさを実感し、みんなでいちょうの葉を使ってベッドを作った。今年は、学年で育てた菜の花の種を算数の数の活動に活用した際、「この音いいよ」と、種をカラカラさせ、種をビニル袋に入れてより大きな音を出して楽器を作り出す子どももいた。食育の学習でそらまめの収穫の手つだいをした際には、「そらまめくんのベッド」という絵本を思い出し、実際のそらまめをよく観察したり、そらまめくんのベッドを作ったりした。また、卒業の会で歌う全校合唱や給食時間に流す音楽の曲を決める際には、歌詞の一つ一つを聞き比べたり、その場にあった曲を選ぼうとしていたり音楽の心地よさも感じたりしている。本学習を通して、一人一人心が洗われ、素直に感じる心を大切にしてほしい。また、人の心の美しさにも気づくことや、美しいものを見つけたいと意図的に探し出したいという心が育つような時間にしたい。

(3) 本時の教材について

この教材は、語り継がれている名作の一つである。人の心の美しさがひしゃくの色を変え、そしてあふれる水と7つのダイヤモンドを出現させた。その七つの星は空に輝くという話である。ひしゃくの色が変わったりダイヤモンドが出てきたりしたのはなぜだろうという問いから、女の子の生き方や女の子が大切にしていた思いに焦点をあてて、人の心の美しさについて考えていきたい。そして、人の美しさに気づけた子どもたちの心も美しいということを伝えたい。

3) 指導計画



4) 評価についての取り組み

①ねらいを達成するための指導法の工夫

・教材提示 (ICT 機器の活用・映画館のような環境作り・BGM の使用) (子どもと教材)

感動、畏敬の念は上記にも述べた通り、物語の中に語られている美しいものや清らかなものに素直に感動するような体験が大切である。これを本時に求めるならば、まず教材との出会いの瞬間だろうと考えた。また、今回活用する教材は子どもの実生活とはかけはなれた童話である。子ども自身が教材との距離を縮めることで、よりねらいとする価値への深まりが期待できる。子どもと教材との距離を縮めるためには、子どもが主体的に教材に向かう姿勢が必要である。そのための手立てとして、教材提示を工夫した。

・書く活動～教材と向き合う時間を十分に設定 (子どもと教材)～

一人一人が、じっくりと教材のよさを感じ、それを一人一人が自分の言葉で表現できるような手立てとして、教材を読んだ後に書く活動を取り入れた。また、展開の後段にも自己を見つめる活動を設定した。感動、畏敬の念は一人一人の「感じる心」が大事だと考えている。そのため、まずは一人の時間を十分にとることにした。

・話し合い～一人一人の感じ方があることの共通理解 (子どもと子ども)～

共通教材は、一人一人の感じ方が違うことに気づけるよさがある。教材への感動がそれぞれであること、また、同じ視点で教材を見たときにも一人一人感じ方考え方があるということを実感する場として、友だちと話す場を意図的に設けた。

・発問など教師から発する言葉の吟味～ (子どもと教師)～

教材への感動を大切にしながら、女の子の生き方を通して人の心の美しさに気付けるような工夫をする。(本時の展開を参照)

②実際の評価の視点 (本時の展開を参照)

[書く]

・教材を読んで感じたことをキーワードや文、絵で書く (ふせん)

教材を読んだ感動を一人一人が視覚的にも見えるようにすることで、発言だけでなく自分の思いを表出する。また、友だちの考えを理解する手立てにもなる。

・導入と展開の後段における思考の変容 (導入時：ホワイトボード 展開の後段：ワークシート)

子どもがどう感じどう考えたのか学びの広がりや深まりを子ども自身でも振り返れるよう、導入と展開の後段では同じような発問をもとに考えさせる。その際使用するワークシートは、一人一人の思いが表出でき、また記録として残るため効果的であると考えられる。学習を振り返りながら自己と向き合い、書けるような工夫をする。

[行動・表現]

主に発言と傾聴に着目し以下のように分類して考える

i) 発問に対して自分の考えを伝える (発言)

ii) 教師や友だちの話をよく聴いている。

・うなずきやあいづちなどの反応する姿 (傾聴に見えるが実際に傾聴かは判断しづらい)

・友だちの考えと同じ・違う・似ているなどの考えを述べた上で、自己の考えを伝える (発言・傾聴)

・友だちの考えをふまえて、考えを述べている (深い発言・傾聴)

発言の内容については、道徳的諸価値に関連した考えを述べているかに着目する。

5) 本時の学習

(1) 本時のねらい

- ・女の子の生き方を考えることを通して、すがすがしい心を育てる。

(2) 学習指導過程

	学習活動	○予想される発問・予想される子どもの意識の流れ	・指導の手立て◇評価の視点
導入	1. 課題理解	○どんな時に「わぁ!」「すてき」「きれい」と感じましたか。 ・花火 ・自然 ・海 ・景色	・価値に対する理解の実態把握 ・本学習の主題を子どもたちに提示し本時の学習の課題を理解させる
展開	○教材を読んで考える 2. 見つめる [自己と教材]	○「わぁ!」「きれい」「すてき」と感じた心をたくさん書き出そう ・女の子のやさしさ ・七つの星が空に輝いたところ ・ひしゃくの色が変わったところ	・教材への感動をより高めるため、映画館のような環境を作り、教室正面の黒板にスクリーンを貼り、場面絵を映し出しながら教師が読む ◇感じた自分の心をキーワードや文、絵で表出できているか（ふせん） ・自分が感じたことを表出できたことよさを自覚させるような声かけ ・自分の思いを表出し、共有できたことよさを自覚させる声かけ ◇感じた心の共感的理解ができているか。（あいづち、対話）
	3. 話し合う (i) 資料で感じたことを（数人で行う） [自己・教材・他者] それぞれの視点で考える (ii) 女の子の生き方を（全体で行う） [自己・教材・他者] 同じ視点で考える	【学習テーマ】 ひしゃくの色が変わったり、ダイヤモンドが出てきたりしたのはどうしてだろう？ ・女の子が優しくかったから ・女の子が助けたから ・相手も喜んでいたので ・女の子の気持ちが、ひしゃくに伝わったから	・親切思いやりの「やさしさ」とこの「やさしさ」の尊さに気付く
		(女の子の生き方で「いいなあ」「すてきだなあ」と思ったところは、どこですか。) (女の子はどんなことを大切に生きていたんだろう。)	
	4. 見つめる [自己・自己の生き方]	○人の心の美しさを考えて感じたことや考えたことを書きましょう ・自分のことよりも誰かのために行動した <u>女の子</u> がすごい ・ <u>景色</u> だけではなく、 <u>人の心も美しい</u> ということがわかった ・きれいなものを見つけると、とても気持ちがいい	◇人の心の美しさに気付く（発言） ・一人一人感じ方が違うということに気づかせるために、女の子の思いを中心に考えさせる ◇思考の広がりや深まりが見られたか（ワークシート）
終末	5. 学習を振り返る	○今日の学習を通して感じたことや考えたことを教えてください	◇考えを伝えることができる（発表） ・一人一人が違った感性があることを理解し、人の心の美しさに気づけた自分の心の美しさを自覚させる。

6) 本時の評価について

- 子どもが、女の子の生き方を通して価値のよさを感じ考えていたか。
- 子どもが、自分自身との関わりで価値を深めていたか。

7) 授業の実際（波線，傍線部分が評価に値する部分）

【自己を見つめる活動】

T 今日の学習で、「心」を考えました。身近に同じようなことがあれば書いてください。

C 女の子は犬やお母さんや旅人にお水をあげて優しいと思った。

T そこに気が付けた〇〇君の心は素敵だね。

C 自分より相手を心配しているところが優しいと思った。

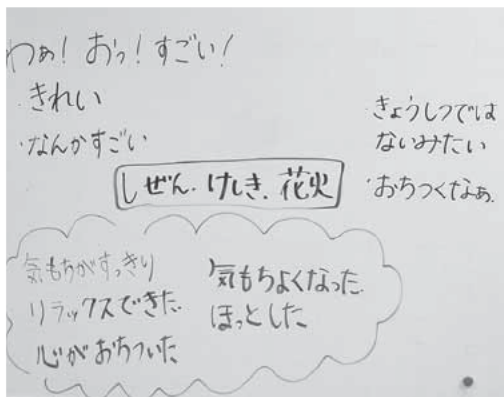
T 優しさに気が付けた〇〇さんの心も素敵だね。

C 自分は飲まないで、みんなのことを考えたことが優しい。

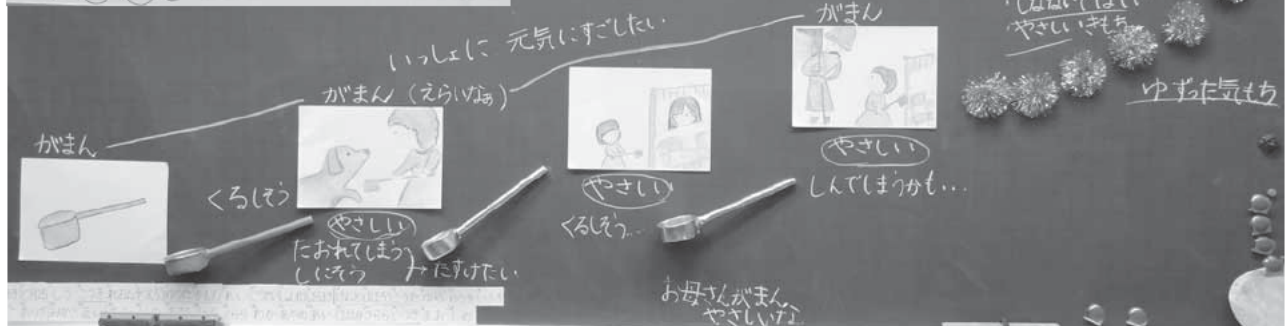
T 気が付けたところが優しいね。

C ほくがすごいと思ったのは、女の子の我慢しているところが、きれいだなと思った。もし女の子が自分なら、水を飲んでしまうかもしれない。こんな素敵なことがあったのを知れたので、次はほくもやってみようと思った。

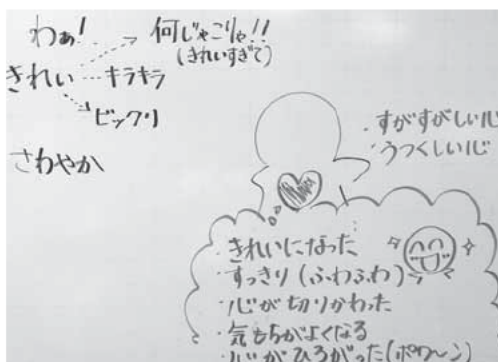
T 今日は「わあ・すごい・きれい」この気持ちについて考えました。女の子のやってきたことから、優しいところを見つけられたあなたたちも、きれいな心をもっているなと思います。



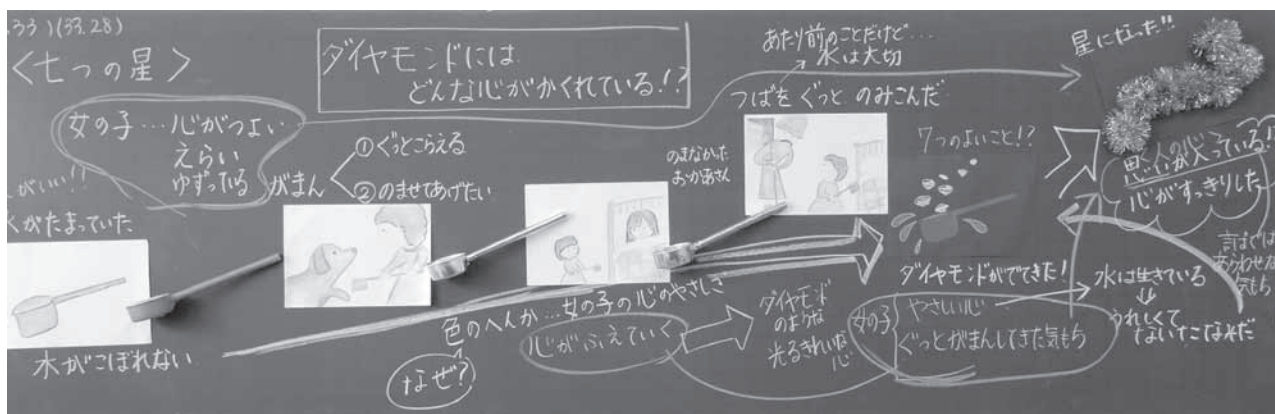
教師が、自己を見つめさせる発問をしたが、子どもたちは自己をふりかえることよりも、教材理解で終わってしまった。教材理解と自己のふりかえりの在り方、畏敬の念のような感動教材は教材の中で価値をじっくり味合わせるの方が大切なのか、授業デザインが課題である。



8) 後日再度授業した際



前回は教材理解で終わってしまったので、後日もう一度授業を実施した。すると、教材理解をもとに語る子どもたちが増えた。一人一人が、教材を理解するためには、一読では難しいのかもしれない。さらに、今回は「ダイヤモンドには、どんな心がかくれているか」というテーマのもと、話し合いをした。テーマをはっきりさせることで、教材でねらうことが明確になり、子どもが追求できる学習環境を整えることができた。自己の生活に結び付けることができなかったが、「人の心の美しさ」に着目して考えることができたように思う。



4. 1. 1. 1. 今後の方向性と課題

教科化に向けて、評価も考えていくが、まず、Dの柱（生命の尊重、自然愛、畏敬の念）に関しては、感動教材を用いた場合は、その感動を教材提示で感じられる工夫が必要であると実感した。今回はICTを活用したが、範読後「わあ」と、教室の天井に見えた七つの星に感動していた子どももいた。そういう感じる心を大切にできたと思う。また、追求していく過程でテーマ型の発問の必要性を感じた。1回目と2回目の子どもの意欲が全く違った。教材理解の部分も多少あるだろうが、教材を基に、自分が立場を明らかにしながら考えられる授業デザインだったからだと思う。今後も引き続き、テーマを意識した授業デザインを考えていく。

4. 2. 小学校中学年の実践

4. 2. 1. 小学校3年生 教材名「富士と北斎」（私たちの道徳3・4年）

1) 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目D-21〔第3学年及び第4学年〕「美しいものや気高いものに感動する心をもつこと」に基づいて指導するものである。科学の発展を期待し理性の力を信じることと同時に、人間の力では到底説明することのできない美への感動や、崇高なものに対する尊敬や畏敬の念をもち、人間としての在り方を見つめなおすことが求められる。

また、本大主題「日本に生きるぼく・わたし」に対し、「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する心」、「感動、畏敬の念」、「自然愛護」「国際理解、国際親善」の内容項目を関連付け、日本人としてどう生きていくかを追求していく。

(2) 子どもの実態より

本学級の児童は、「日本が自分の大切な場所だという意識をもって過ごしているか。」には、76%の児童が肯定的にとらえている反面、「住んでいる場所が自分の大切な場所だという意識をもって過ごしているか。」に関しては肯定的にとらえている割合が45%であり、「地域の行事に参加するか」に対しては、28%とさらに低くなっている。このことから、地域や地域への参画の意識が低いことがうかがえる。また、外国の交流についても肯定的にとらえている割合が62%であり、こちらも意識が高いとは言いきれない結果となっている。これらの実態から、本学級の児童に郷土や我が国への所属意識を高め、それを基に世界への思いを広げていくことが重要だと考える。

(3) 本時の資料について

富士山に魅せられた葛飾北斎の話である。本教材は、児童の生活経験から遠い体験が描かれている教材である。北斎が、富士山をすぐに描けなかったことや富士山を描き続けたことに、児童は疑問を感じ、北斎の思いを自由な発想で多面的・多角的に考えを深めていくことができるであろう。そこで、児童の受け止めから「北斎

は、富嶽三十六景にどんな思いを込めたのか。」とテーマを設定し、話し合うことで北斎の行動の意味を考えていく。「富嶽三十六景」の絵を見ることで、富士山の美しさや想像したり、感じたりすることから美しいものを感じ取る心や北斎の生き方の美しさを感じ取る心が自分にもあることに気づき、この心を大切にしようとする道徳性を養っていく。

2) 大主題学習計画 「日本に生きる、ぼく・わたし」

時間	主題名	教材名	道徳的価値	他教科との関連
1	伝統と文化を受け継ぐ	ふるしき (学研3年)	伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する心	探究 CHANGE JAPAN —MATURI—
2	我が国に魅了される心	富士と北斎 (私たちの道徳3・4年)	感動, 畏敬の念	
3	自然を愛する	富士山を救え 一田部井淳子— (文溪堂4年)	自然愛護	
4	我が国と他国との違いを受け入れる	ぼくのおべんとう (東京書籍3年)	国際理解, 国際親善	

3) 本時の学習

(1) 本時の目標

自然の美しさや日本のよさ、北斎の生き方のよさを感じ取る心が自分にもあることに気づき、この心を大切にしようとする心情や態度などの道徳性を養う。

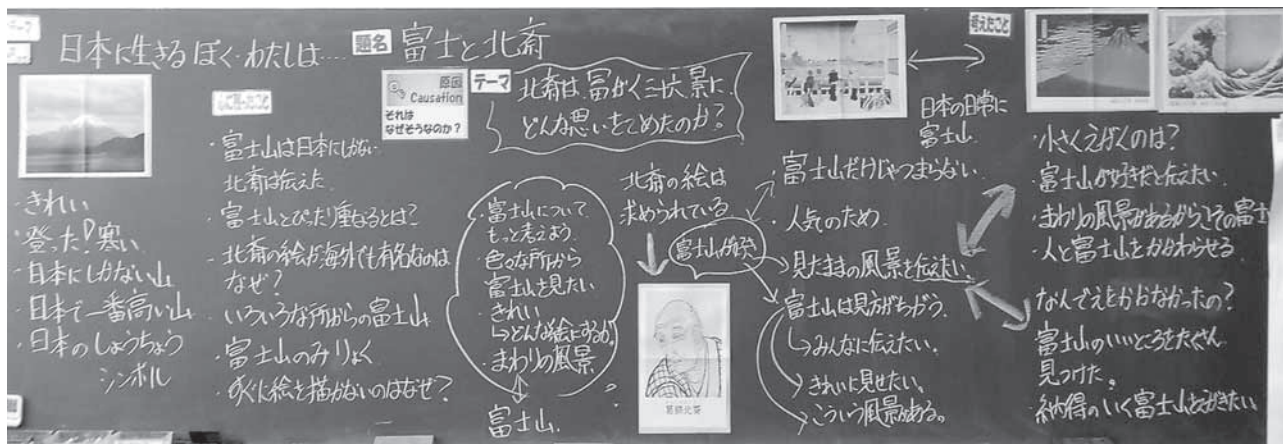
(2) 本時の学習

学習内容と活動 ○主な発問 ◎中心発問 ・予想される児童の反応	◇指導上の留意点
1 大主題「日本に生きるぼく・わたし」を確認する。 2 富士山の写真を見て、感じたことを話し合う。 ・とてもきれい。自分も見ることがあって、感動した。 ・富士山は世界遺産に登録されている。	◇学習のつながりを意識することができるように大主題を確認する。 ◇富嶽三十六景の絵を事前に見せておく。 ◇富士山の写真から感じた率直な感想を引き出し、教材への導入を図る。
3 「富士と北斎」を視聴し、話し合う。 ○心に残ったことや不思議に思ったことは、どんなことか。 ・20年も描くことを待っていたのはなぜだろう。 ・自分の理想の富士山の絵を追い求めている。	◇児童の、教材の受け止めから本時のテーマを設定する。 ◇児童の言葉をコーディネートし、本時のテーマへと導く。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 北斎は、富嶽三十六景にどんな思いを込めたのか。 </div>	
○北斎が再度、江戸を出たときどんなことを思ったか。 ・何て、きれいなのだろう。今も変わらずに美しい。 ・もっともっと富士山のいいところを見つけたい。 ・富士の魅力を感じる存分描くときがきた。 ◎北斎は、富嶽三十六景にどんな思いを込めたのか。 ・富士山には、色々な見え方がある。隅から隅まで美しい。 ・日本を愛していた。旅をして日本のすてきな所をたくさん見てきて、その中でも一番だと思った。 ・自然の美しさは、人間の力では作り出せない物だ。 ・富士山の美しさは日本のよさ。富士山の美しさを多くの人に伝えたい。	◇共感的な発問を取り入れ、北斎への共感をもとに話し合いを進めることができるようにする。 ◇北斎の思いを分析的に考え、「自然の美しさ」や「日本のよさ」「北斎の生き方のよさ」を感じ取る心につなげていく。 ◇考えを深めることができるよう、児童の思考に沿って、「なぜ、20年間描かなかったか」や「北斎の生き方をどう思うか」など問い返していく。 ◆北斎が富士山に魅了された理由を考え、自分にある自然の美しさや日本のよさ、美しい人の生き方を感じ取る心に気付くことができたか。

<p>4 自然の美しさや日本のよさ、北斎の生き方を感じ取る心と自己とのつながりを考える。</p> <p>○今日の学習を通して、どんなことを考えたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・富士山の美しさに感動した。日本は、たくさん自然があるすてきなところだ。 ・日本にはたくさんの魅力がある。今、調べている昔の物や日本に生きてきた人もそうだ。 ・「富嶽三十六景」の美しさに感動した。富士山を愛し、描き続けた北斎はすごい人だな。 ・日本のことをもっと知りたい。よさを伝えていきたい。もっとよくしていきたいな。 <p>○自分の学びを評価する。</p>	<p>◇自分の生き方への考えを深めることができるように学習したことと自分とをつなげて書く活動を設定する。</p> <p>◇探究単元での調査と結びつけて考えることができるように声を掛ける。</p> <p>◇本時で考えたことから意欲を高め、探究学習の学びにつなげていく。</p> <p>◇自己評価カードを活用した自分を評価することを通して、自分が考えていることを感じ取り学びをよりよくする力を伸ばしていく。</p> <p>◆自然の美しさや日本のよさ、美しい人の生き方を感じ取る心を大切にしていこうとする心情や態度など道徳性を育てることができたか。</p>
--	---

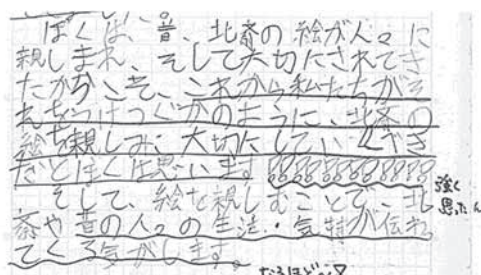
4) 授業の実際

本時のテーマに対し、北斎への共感をもとに話し合いを進めることができるように、「北斎が再度、江戸を出たときどんなことを思ったか。」と、共感的な発問を投げかけた。「富士山が好きだからこそ、色々な富士山を描いた。」「富士山のことをみんなに伝えたい。」などの考えが出された。話し合いの途中、事前に配布していた富嶽三十六景の絵を見返し、「そんなに好きなのになぜ、富士山を小さく描いている絵があるの？」と疑問を投げかける児童が現れた。「富士山が好きという考えと富士山だけではつまらないという考えにはズレがあるよね？」と考え方のズレを明確にして、問い返した。すると、「富士山が好きだからこそ、色々な富士山を描いた。」「富士山の見え方のちがいに気付いて、こういう風景がある、きれいだと思ってもらいたいから風景と一緒に書くようにした。」などの考えが出され、北斎を通して昔の人の思いを考えることができた。「私も富士山をすごいと思う。私の日常にも富士山がある。」など富士山が日本人の日常の中にあり、自分の生活の近くにもあることに気付くことができた。本時のテーマに対し学習を通して考えたことを道徳ノートに書いて学習を終えた。

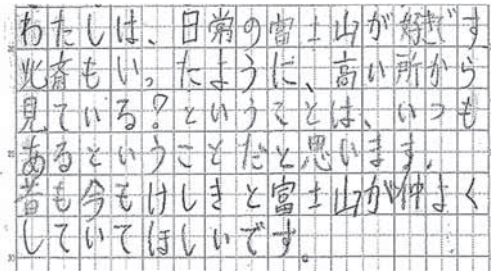


5) 評価の内容

児童の「道徳ノート」から授業から児童がどのようなことを考え、自分自身を見つめていたかを見取りとして、「評価」する言葉を作成した。



北斎を通して、昔の人の思いに気付いている。また、昔の人の生活や思いに気付く方法や、その生活や思いを大切に、受け継ぐために自分ができることを考えている。



日本における富士山の存在を「高いところからいつも見守ってくれている存在」だとまとめている。これからも日本の象徴である富士山を大切にしていきたいという思いが伝わってくる。

4. 2. 1. 1 今後の方向性と課題

児童の疑問や児童相互の思考のずれから問題意識から高めていくことができた。班試合を通して、富士山の美しさや想像したり、感じたりすることから美しいものを感じ取る心や北斎の生き方の美しさを感じ取る心が自分にもあることに気付いている姿が見て取れた。ノンフィクションの教材であるため、事実と児童の考えのギャップを埋める手だてが必要であったと感じている。北斎は、自分の思いを直接的に残している資料が少ない。今後もノンフィクション教材の活用の仕方を考えていかなければならない。

4. 3. 小学校高学年の実践

4. 3. 1. 小学校6年生 教材名「ぼくの仕事は便所そうじ」(文溪堂「6年 6年生の道徳」)

1) 主題名 人のために働く喜びとは (C 勤労 公共の精神)

2) 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

人間が社会で生きていくためには、仕事を行わなければならない。仕事をすることによって賃金を得て、人は社会で生活していける。人が社会で働き、自己の生活を送れるようになるためには、働くことに対して前向きに取り組めて、自分の仕事に誇りをもつことが大切であり、そういった意識を幼少期から育むことが大切である。児童たちは「家庭」「学級」「学校」という発達段階に合わせた社会で自分の仕事を任される。自分が所属している社会において、与えられた仕事にまずは取り組み、そこで得た喜びや達成感を基にして、新しい仕事やさらに難しい仕事へと仕事の質や量を段階を踏んで上げていく。児童たちが自分の仕事に前向きに取り組めるために必要なエネルギーは、喜びと達成感である。仕事に対する喜びや達成感は自分が仕事をしていることに対しての周囲の理解や感謝によって育まれていく。この喜びや達成感の積み重ねによって、人のために働く意欲がさらに高まり、それが自尊感情の高まりにもつながるのである。児童たちには、「当たり前の仕事をする自分の姿」を客観的に捉えさせ、自分の仕事が多くることが成り立っていることに気付かせ、次の意欲へとつなげたい。

(2) 児童の実態

持ち上がりの学級である。児童たちは6年生になり、最高学年という自覚をもって、自分の任された仕事を意欲的に行える子が多い。委員会では、委員長などの大きな役割を担っている子もいる。一年生との交流の中では、六年生として一年生のお世話をする仕事が一年間通してあるが、どの子も「教える・支える」という役目の重要性を感じたようで、前向きに取り組んでいる。一方、何人かの子は学級や学校での仕事に対して消極的な姿勢を見せる子もいる。「遊びたい」「面倒くさい」という思いが先行してしまい、進んで仕事をしようとする意欲が低い子もいる。そういった子は、自分が望む時に仕事を与えられてこなかったか、努力を誉められるような経験が少ないからだと推測される。本研究を通して、六年生になって自分たちががんばっている仕事について互いに認め合うような体験的な学習を行うことによって、自分たちの仕事に向かう姿勢をもう一度見直すことができ、そこから達成感をもって、進んで仕事をしていこうとする意欲を育みたい。

(3) 教材について

本教材は、東武動物公園の名誉園長を務められた西山登志雄氏が上野動物園で働き始めたころの実話である。便所そうじの仕事をあまり進まずにしていた西山さんは、おばあさんの「ありがたい。ありがたい。」という言葉聞き、それをきっかけに、仕事に対する姿勢が変わった。あまり気乗りせずに行う仕事があったとしても、自分が働くことで周りの人に喜ばれ、強いてはそれが社会の役に立ち、それが自分の喜びになることに気付かせることができる教材である。

3) 研究主題に迫るための手だて

A. 学習指導過程の工夫

昨年度までの研究により、問題解決的な学習の学習指導過程として、「つかむ」の段階において、児童たちがねらいとする道徳的価値の理解等について問題意識をもち、「深める」の段階において、その問題意識を基にして、ねらいとする道徳的価値について他者と関わりながら相互に吟味することができるように「学びの視点」を設定する。本研究では、意識調査の結果である「自分の仕事に対して誉め言葉はいらない」という児童たちの声を生かし、「仕事をしている友達にどんな言葉をかけるといいか」を学びの視点とした。ただし、話合いの流れから学びの視点は柔軟に変えていくことも十分に考えられる。

B. 道徳的行為による体験的な学習

体験的な学習として「エンカウンター」の要素を取り入れた展開を「生かす」の段階で行う。児童たちが「深める」の段階で考えてきた「自分の仕事に一生懸命取り組むことの大変さ、素晴らしさ」について自分ができるようになるために、友だちからの具体的なアドバイスや励ましの言葉をもろう。ここで大切なことは、互いに相手が「自分の仕事に一生懸命取り組む」ことができるような言葉を考えることである。相手のかけてほしいと考えている言葉を探す行為は、自分がかけてほしいと考えている言葉を探しているのと同じである。学習の形態としては三人組で行う。教材を用いて、ある一定のルールを作り、互いに声を掛け合える環境を作る。

C. 評価における手立て

ノートに本時での学習で学びの視点について自分が考えたこと（納得解）について書く時間を設ける。また、意識調査から、観察対象児を設定し、授業後にインタビューを行って、個々の評価としていく。

4) 本時の学習

(1) 本時のねらい

人のために働く意義を理解し、進んで自分の仕事を見つけ、人のために働こうとする意欲を高める。

(2) 学習指導過程

	学習活動 ○主な発問 ・予想される児童の反応	★指導上の留意点 ◆評価
つかむ	<p>1. 意識調査の結果を発表し、問いを児童たちになげかけ、児童と共に「学びの視点」を設定する。</p> <p>○意識調査の結果です。なぜ声かけてほしくないの。</p> <p>・恥ずかしいから ・仕事をするのは当たり前だから</p>	<p>★仕事に向かう姿勢を見直すように意識調査の結果の発表をする。</p> <p>◆仕事に向かう姿勢を見直すことができたか</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">【学びの視点】友達がもっとがんばれるような言葉かけてどんなものがあるのか考えよう</div>	
深める	<p>2. 教材「ぼくの仕事は便所そうじ」を読んで話し合う。</p> <p>○毎日、毎日便所掃除をする西山さんはどんなことを思っていただろう。</p> <p>・汚いからしたくないな。</p> <p>・本当はもっと違う仕事がしたい。</p> <p>・早く代わりたくないな。</p>	<p>★自分の仕事に対して前向きな気持ちで取り組むことができていない西山さんの心情に気付かせることによって、仕事に向かう気持ちというのは様々あることを押さえる。</p>

深める	<p>○便所掃除に精を出す西山さんはどんなことを考えていただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっとがんばろう。 ・ぼくの仕事は人の役に立っている。 ・喜んでくれる人がいるから、もっとよくしたい。 <p>○西山さんのすごいところはどんなところだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人が嫌だと思いう仕事も進んでできること。 ・毎日一生懸命仕事をする事。 ・自分の仕事を大事に考えていること。 	<p>★おばあさんの言葉によって気持ちが変わり、自分の仕事に前向きに取り組む西山さんの姿を通して、前向きに働くための大切な考えに気付かせる。</p> <p>★自分にも同じような姿があるか考えさせる。</p> <p>◆西山さんの凄さについて自分の考えをもつことができたか</p>
生かす	<p>3. 「友達ももっとがんばれるような言葉かけ」について考え、相手に伝える。</p>	<p>★三人組で行う。</p> <p>★伝え合うための教材を用意し、それを基にして伝え合いを行う。</p> <p>◆友達の仕事に向かう姿勢について相手が喜ぶ声掛けができたか</p>

5) 授業の実際と考察

「つかむ」の段階では、児童たちの意識調査の結果から、「どんな声掛けをしてもらいたいかの結果は、多くの子は言われなくてもいいと思っているようです。どうして?」と問いを投げかけると、「目標はもっと高いから」「モチベーションが減ってしまうから」「嫌味っぽく聞こえる」と反応が返ってきた。仕事に対して「褒められる方（プラスの声掛け）が児童のやる気を伸ばす」という教師の考え（一般的な考え）と意識調査から分かった実際の児童たちの考えとでは違いがあり、その違いを「学びの視点」とすることで児童たちは授業に対して自分事として取り組むことができると考えた。学びの視点は一人一人の仕事への意識を高めるために「仕事をもっと好きになって取り組むためには」とし、その一人一人の仕事へのやる気を引き出すため、具体的な手立てとしての学びの視点を「もっと友達が仕事を好きになるように友達にどんな言葉かけがいいか」とした。意識調査の結果を基に、本時の学びの視点を設定することは児童たちの実態に合った「学びの視点」を設定することができ、児童たちが主体的に「学び」に向かうことができるようにさせるため、効果的であると感じる。「意識調査の内容」「教材」「本時の主題」のこの三つをどのように関わらせていくかが、非常に重要であり、何に重きを置くかが「学びの視点」を設定する上で大切である。意識調査の結果は児童たちの生活体験に根付いたものであり、個々の今の気持ちを顕著に表したものであったため、児童たちの「学びの視点」について追求する気持ちをもつことができた。

「深める」の段階では、教材の西山さんの思いに自我関与させて考えさせた。予想していたよりも導入で時間をかけすぎてしまったため、「深める」の一つ目の発問は省略した。二つ目の発問については「きれいだと思ってほしい」「きれいに使ってほしい」と始めのうちは相手に理解を求める発言が多かったが、途中から「喜んでもらえるようにしたい」「やるからにはきれいにしたい」など使う人の事を考えた発言や前向きに自分から進んで行く発言が出た。その後、西山さんの凄さについて、「3つ以上出すこと」と条件を伝え3人組で話し合わせた。「普通に仕事をしているのではなく、プラスのこともしている」「嫌な仕事でも一生懸命」「行動力がある」など、西山さんの仕事に対する凄さについて、仕事に向かう気持ちや具体的な行為など多面的に考えることができた。

「生かす」の段階では、教材における仕事を前向きに行う西山さんの凄さについて共感的に捉えてきた思いを基に、「西山さんはおばあさんの言葉でできるようになりました。今からみんなも同じような体験をします。」と投げかけ、3人組になり、互いの仕事にプラスな言葉かけをし合った。自分がどこでどんな仕事をしているかを視覚から思い出すことができるように、「伝え合い活動シート」を各組に一枚配り、それを見ながら交流する時間を6分間設けた。互いの仕事について質問し、相手のことを考えた言葉かけが出来ているグループがある一方で、話し合いが成立していないグループもあった。全体で交流し合う場では「言葉を言ってもらえた人?」と聞くと、手が挙がらず、理由を聞くと「嫌味を言われた」という子が出てきた。このままでは、一人一人の仕事に向



- ① 前回の授業での教師が感じた問いを児童たちに投げかけ。【3分】
「どうして頑張っている仕事をしていることについて声掛けをしてほしくないのか」
- ② ①の児童たちの反応。【10分】
- ③ 体験的な学習の実施。【5分】
「自分が頑張っている仕事について詳しく内容を書こう」
- ④ 相互交流（ワークシートを渡す）【10分】
「友達のプリントを読んでコメントを書いてあげよう」
- ⑤ 交流後の振り返り【4分】
「書いてもらったコメントを読んで感じたことを書こう」
- ⑥ 教師から【2分】

かう気持ちが高まらないと考え、教師主導による価値の自覚化を図った。何人かにしている仕事について発表させてから「近所の子にサッカーを教えているの？すごいと思う人？」と教師が児童の仕事の価値付けを行った。すると、「よく教えているな。」「勇気があるな〜。」と相手の働く意識を高めるような言葉が返ってきた。また、「近所のゴミ拾いをしている」という子がおり、その子の行為について、「すごい」と思った子に発表させると「落ち葉はたくさんで、面倒くさいのに拾うなんてすごい」と伝えていた。「エンカウンター」は高学年における体験的な学習の一つとしては効果の期待がもてるが、「児童たちの実態」「エンカウンターの内容」「何を体験させたいのか」を考慮する必要がある。本時の授業からさらに改善した内容で授業を行った。その展開は以下の通りである。

教師の願いは、「体験的な学習」として自分の思いや感じたことを体を動かし、言葉によって自己表出してもらいたいと思うが児童たちの実態を考えた場合、このように書いたものを交流し合うことも一つの「体験的な学習」の形としてはあってよいと感じる。書いたものを友達と交流し、友達に書いてもらったコメントについてどう思ったのかを書かせたが、今回の授業でのある一人の観察対象児は、「その仕事を楽しむことが重要、仕事のやりがいや楽しくやる方法を見つける」ととても好意的なコメントを残していた。「照れ」や「恥ずかしさ」があるとは思いますが、「言葉」で伝えることはレベルが高いように感じる。

「つなげる」の段階では、「仕事をもっと好きになって頑張れるためにはどうしたらよいか」という「学びの視点」についての自分の考えを付箋に書かせて、授業を終えた。

授業直後に、別室で授業における児童たちの成長の評価として、担任ではない教員がインタビューを行った。インタビューの内容は①「「学びの視点」について、自分が考えたことは何ですか」②「体験をする時間があつたけれど、そこではどんなことを考えましたか」③「今日の授業を通して、新しい自分の中の学びにどんなことがありましたか」の三つとした。下の□は、意識調査より自分の仕事についての自尊感情が低い子へのインタビューの結果である。

〈出席番号5番〉

- ①やっぱり自分自身のご事は過小評価なので、もっとがんばろうと思ったし、失敗しても落ち込まない。落ち込むと何だかもったいない。
- ②となりの子は委員会をがんばっている。もっとがんばってねと伝えた。でももっとがんばってほしかったこともある。
- ③他の人に褒められるのも大事。やる気アップにつながる。

6) 評価について

インタビュー評価は担任ではない違う教員がインタビューを行った。そのため、かえって本音を語る子もいた。自分のことを「過小評価」していた子がよりよい自己を目指す前向きな感想を述べていることが分かり、児童たちが感じたことを素直に聞く方法として一定の効果が見られることが分かった。児童自身の授業の振り返りという面よりも授業者の授業の内容を反省的に振り返る上でも有効であった。学級担任だけではできない方法であるが、児童たちの本音を知る上では、学年で協力して行うなど、その可能性は大事にしたい。

4. 3. 1. 1. 今後の方向性と課題

評価の仕方として、授業後に担任ではない教師によるインタビューは子どもたちの本音を聞くことができるため、興味深い方法であった。しかし、個々の見取りという点では人数が数人に限られてしまうため、通知表に乗せるような評価とはなりにくい。教師の授業を見直す手立てとしては有効であると感じる。35回ある授業の中で年間計画にそって計画的に行うことが求められる。

5. 研究の成果と今後の課題

小学校低学年、中学年、高学年において、それぞれの子どもたちの発達段階を踏まえた「問題解決的な学習」と「評価の方法」について取り組んできた。昨年度の研究から道徳の時間における「問題」について2つ定義をし、「問題解決的な学習」とはいかなるものであるかを検証してきた。低中高学年で授業実践を重ねることで道徳の時間で扱われる「問題」とは学年によってその内容が異なる。低学年は教材の人物に自己関与させることが自分の生活を振り返るためには有効であるため、「問題」も「教材の人物の行為や思いから生まれる問題」であることが多く、高学年では教材の人物や教材そのものを客観的に見るようになるため、「問題」も「道徳的価値についての理解を深める問題」であることが多い。「問題」の設定については、発達段階を考慮しながら子どもたちがどんなことに興味を持つのか、何を考えたいのかという子どもの視点を授業者が持つことが大切であり、授業の主体にきちんと子どもを据えることが重要である。課題としては、「問題解決的な学習」そのものをどう定義づけていくかということである。道徳の指導法が変わることを求められている今だからこそ、教科書をどのように使えば「問題解決的な学習」をきちんと行うことができるのかを立証していくことが課題である。

評価において、その一つの方法として「道徳ノート」の使用を行ったが、子どもたちが自分の考えを表出し、教師が個々の学習の履歴を蓄積する上で非常に効果的であった。子どもの記述から子どもたちの道徳の時間での学びを把握し評価することができた。課題としては、その子どもたちの学びを教師がどのように文言として表出するかということである。子どもの学習の履歴を子どもたちの学びの励ましになるような文言としてどのように変えていくのが今後の課題である。

6. 参考文献

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 平成27年7月

「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）平成28年7月22日道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議

道徳教育9月号2015 道徳授業で「問題解決的な学習」にチャレンジ 明治図書

「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業 諸富祥彦 著 図書文化

問題解決の心理学 安西祐一郎 中公新書

授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス 高垣マユミ編著 北大路書房